

国際理解教育を通して支援を「自分ごと」に

「“支援”と“協力”の違いについて深めることから、国際理解教育と特別支援教育の共通点を見出した。」そう語る、箸本 淳也 先生（石川県立いしかわ特別支援学校）に、JICA教師海外研修や開発教育指導者研修に参加したことで得た気づきや、その後の活動についてお話を伺いました。

「車いすテニス」との出会いが生んだ、特別支援学校での教育に対するモチベーション。

小学校の体育の先生になりたくて受験した教員試験。採用のタイミングで配置されたのは特別支援学校でした。特別支援に関する専門知識を学びつつ、子どもたちにスポーツの楽しさやその価値を知ってもらうにはどうすれば良いか…試行錯誤の日々の中、特別支援学校での取り組みに対する気持ちの変化を生むきっかけくれたのは、**パラスポーツ「車いすテニス」との出会い**でした。

実はスポーツが好き！でも、本格的なスポーツは自分にはできない…と思い込んでいる子どもたち。「やってみる？」と一歩を踏み込んで尋ねた際の子どもたちの**ぱっと花開いたような笑顔の輝き**を見た時から、全てが始まりました。

授業では、始めから全て本物の用具やルールで授業を進めるのではなく、柔らかいスポンジのボールを探したり、得点先取型のゲームではなく、何回ラリーを続けたら勝ちというルールに変えたり、**それぞれの生徒の出来ることに合わせて、リアルな体験が出来るアプローチを意識**しました。その結果、子どもたちの興味は体育から部活動に繋がり、合宿や大会に参加するなど「自分たちもできるんだ！」と、**どんどん変化していく生徒たち**。その時に、なぜ自分が特別支援の教育に携わっているのか？何が出来るのか？に面白みを見出し、勉強を進めるうちに、途上国の特別支援学校でどのような教育が行われているのかを知りたいと思い始めました。

“国際支援”と“特別支援”-「支援」について深く考えるキッカケになった、教師海外研修。

2017年にJICA教師海外研修でフィジーを訪問しました。現地では、地元の特別支援学校を訪れて、現地の先生の子どもたちへの想いや理念を伺うなど、途上国のエネルギーを感じながら、文化も教育システムも違う国で、特別支援に対して考える素材や生の教材に触れることができました。また同時に、「支援」「協力」とは何か？をとても深く考えるきっかけになりました。

「支援」とは一方的なもので、「協力」は立場や同じ土俵で物事を考えること。この考えから、国際支援と特別支援は似ていると感じたんです。特別支援学校も「支援」を受けることが多い。でも支援は時に子どもたちのネガティブさを招くこともある。支援ばかりではなく、どう「協力」に結びつけていくか-「支援と協力」について深く考えたことで、国際理解教育を「いろんな国のいろんな人がいるね。」で終わらせるのではなく、より深い学びを生み出すことが特別支援での学びを大きくすると強く感じました。

フィジーでの発見を子どもたちに伝える授業



俯瞰することで感じた国際理解教育の生徒にとっての価値と、「汎用性」への挑戦

JICA教師海外研修での経験や日々の子どもたちとの活動を経て、「教えて支援していくのではなく、子ども主体で考える支援」の大切さに気づき、**体育という切り口を使って、国際支援を考えることで特別支援について考える授業を作ってみました**。そこで、より実践的・発展的な学びを求めて、2018年にJICA地球ひろば開発教育指導者研修に参加をしました。

実践授業では、ロンドンパラリンピックハイジャンプ金メダリストのイリエサ・デラナさん（フィジー）のストーリーを通して「支援」について考えることで、はじめは資金の「支援」しか思いつかなかった子どもたちが、サウンドテーブルテニスの後輩への指導で、自分にも出来る「支援」があることを知るなど、**国際理解教育は「外=社会を学ぶことができる教育」であると同時に、自己有用感を得たり、物事を「自分ごと」に捉えることにも繋がるのだと実感**しました。だからこそ、自身の学校外での体験を生徒たちに伝えるとともに、体育を通じて子どもたちがリアルな体験をして挑戦・努力することの楽しさを実感できる授業を心がけるようになりました。

先生が少し勇気を出して一歩踏み込むと、子供達は大きく変わる。一人でも多くの先生が一歩踏み出せるように！

さらに、開発教育指導者研修の重要なポイントの1つは「汎用性」のある授業づくりを学ぶことでした。学校教育において、特別支援教育の領域の経験者は少なく、学びたいと思っても参考にする教材や資料がかなり少ないと実感していたからこそ、「汎用性」というキーワードは自分に響き、**いろんな学校が使いたいと思ってもらえる授業案を作ることを意識実践**しました。ぜひ様々な学校で**カスタマイズして使ってもらえたら**と思っています。

（実践授業については、添付の授業実践報告書をご覧ください。）

最後に、教員にとっての国際理解教育の面白さは、すべての垣根を超えていけることで、**教科も年齢も超えて語り合える、考えられることだ**と感じています。特別支援だからという壁もなく、より多くの仲間と教育について語り合う場を作りたい、と開発教育指導者研修後に国際理解教育研究会を北陸地区で立ち上げました。教育プログラムや授業をどうやって継続的に実施するかなど教育現場での課題について、JICAの協力を得ながら、現職の教員だけではなく、大学生や大学教授と一緒に実施できているのは、研修を経て得ることができた大きな実りの1つだと感じています。

